

文化ショックと日本人（1）自然環境

高橋 敷

研究の意図と内容

今日、日本人の国際性、また異質性についての論議は盛んで、異文化理解に関する実証的研究や体験にもとづく事例分析も非常に多い。だが、相互のカルチュア・ショックの深層には、まだ十分把握されていない日本人の生活意識の問題が複雑に存在する。いうまでもなく、表現された行動からは見えない、また、文化の担い手自身すら意識していない“側面”(*1)は非常に大きいのである。

この研究は、調査を通じてこれら文化的ショックを構成する因子を抽出分析し、文化的障壁を超えて理解しあえる論理を見いだそうとした。それこそが次代を生きる地球社会人として、独善を避け、あらゆる文化の中での自立と共生をめざす、われわれ日本人の教育的課題でもあるからだ(*2)。

この研究は国内ならびに海外における現地調査、また世界各地からの日本への旅行者や居住者、逆に日本から世界各地への旅行者や居住者への直接調査など、多方面の協力による長期間のデータ収集と統計が基礎になっている。当然のこと主調査は明確な意図と仮説のもとに行われたが、派生した二次、三次の問題別小調査や個別の追跡調査が、その後の論旨を構築した。報告は数回にわたるが、第一回は気候、水質、風土、汚染など、主として「自然環境」に関わる因子を分析、吟味して、生活意識の問題点を考察している。

研究の方法とデータ

研究方法は主に異文化集団を比較対象とするアンケート結果の処理と、個別の面接（追跡を含む）による分析の繰り返しによって行われた。

1. 主調査（一次）・・・3年以上日本在住の外国人と3年以上海外滞在の日本人を対象

「カルチュア・ショックの国際比較」と称し、1978以降、1995現在も続いて実施している。当初は大阪府企画部文化振興室に協力(*3)の形で、1985からは独自に、近年は近畿日本ツーリスト外人センター&ジャパン・ビジターズ・ビューロー両社の技術的な協力も得て、面接取材による調査の対象と範囲を広げている。報告執筆までの主調査対象者の出身および出向国名（また地域）は次のとおりである。

* 在日外国人——男302、女158 計460人

近隣諸国45、東南アジア43、西アジア26、アフリカ7、アラブ4、中南米40、北欧9、ベネルクス9、東欧16、英アイル35、独・オーストリア・スイス58、仏41、スペイン・ポルトガル27、伊20、ロシア4、米加46、濠・ニュージーランド16

* 在外日本人——男136、女63 計199人

近隣諸国25、東南ア29、西アジア4、アフリカ4、中南米42、英19、独26、仏6、伊11、他欧6、ロ2、米加21、濠ニュージーランド14

2. 二次調査・主として自然環境に関わるものは次の三調査であった。

- * 異文化適応における自己評価（同化、統合、拒否、孤立）——主調査対象者
- * 公害や自然環境の破壊についての原因と責任の認識——日本およびドイツなどで
- * 宇宙人のイメージについての調査——世界各国、個人アンケートおよび作品調査

3. 三次調査・二次調査から派生した疑問点に関わる小調査

自然水への安心、ごみ投棄の甘え、気象・気候への信頼、植物の生育についての確信、自然破壊に関する切迫感など——かつての勤務地（南米 Univ. Comunal del Centro del PERU ; Univ. Nacional de Oriente de VENEZUELA および ドイツ・ケルン大）とスペイン、イタリーなどの滞在地、また日本での学生やPTA講座で小人数から回答を求めたものの集積である。

——なお、本報告以降にわたっても、数多く国内調査を実施し得たのは、学校園やPTAの協力、ことに大阪府においては教育研究所連盟共同研究や家庭教育総合セミナーとの、共同研究活動に負うところが大きかった（*4,5）。

日本（人）をめぐるカルチャ・ショック

1. 主調査の概要

主調査は初来日時の日本（人）評価〈驚き〉と、三年たってからの評価〈安定〉を在日外国人から求め、同じ日本評価を長期海外居住の日本人にもしてもらって比較したもの。評価項目は、〈日本の自然環境〉〈日本人の人間性〉〈日本人の公共マナー〉〈日本人の交際と人間関係〉〈日本での社会生活〉〈日本の伝統や固有文化〉の六分野それぞれである〔Table 1〕。

各分野の評価は、それぞれ（+5）・・・0・・・（-5）の11段階とし、6項目の平均値は、接触時、三年後ともそれぞれ ほぼ0（+1・・・-1）を基調とした。

また、評価の参考とするための因子 (Factor) を併記した。因子は六分野併せて200項準備したが、回答者はさらに自由に因子を追加した。なお、評価に大きく貢献した因子について各自一分野3個以内で申告を求めている。

以下、本報告の主題である〈日本の自然環境〉全因子と貢献因子を紹介する。他の分野(次報告以後の関連)については代表的な若干例のみを示した。

〈自然環境〉 雨、風、雪、温暖、湿度、日照、四季変化、天変地異、大気、水、土、花や緑、騒音、風景景観、自然保護と破壊、生物、清潔、ごみ・廃棄物、海、ほか

(以上のうち、とくにチェックの多かった因子)

在外日本人・・四季変化(平均 +1.0): 温暖、水(飲める)、(+0.3)

在日外国人・・風景景観、海(+0.3): 四季変化(-0.4): 湿度、騒音、花(-0.2)

〈人間性〉 親切、まじめさ、熱心、正直、愛想、熟練、教養(+評価の多い代表例)

親切〔過ぎうるさい〕、まじめ〔くそまじめ〕、せっかち、ユーモア、テンピラ、けじめ、働き過ぎ、楽しまない、困っていても知らぬ顔(-評価の多い代表例)

〈マナー〉 にこにこ、おじぎ、謙遜、すぐにくれる(+評価多い代表例)

ジロジロ見る、酔っぱらい、立ち小便、返事ない、唾はき、押す、にやにや、老人に席譲らぬ、レディファースト、自分勝手、エチケット、(-評価多い代表例)

〈人間関係〉 友情に厚い、思いやり、黒人差別がない(+評価多い代表例)

白人に劣等感、アジア人に優越感、聞き耳立てる、安請け合い、約束下手、嗜好き、表現曖昧、会話下手、主体性、ユニークさ、プライバシー(-評価多い代表例)

〈社会生活〉 治安、交通、時刻ダイヤ、品物豊富、衛生、情報、教育(+評価多い)

ラッシュ、公園と緑、物価高、宣伝、押し売り、女性可哀相、有料道路、丸刈り、制服、子ども天国、電車大声会話、学生遊ぶ、いじめ、スペースない(-評価多)

〈伝統文化〉 高教育、衣食住の美、ユニークさ、祭り、横文字看板、(+評価多い)

日本語、風呂、トイレ、塾多い、テスト多い、他人干渉、テレビ子ども番組多い、欧米化、親子が夫婦のよう、子が親の言いなり、団体行動多い、職場第一(-評)

〈その他〉 何につけ任せられる、喫茶店便利、徴兵制がない、皮膚きれい(+評価)

近隣交際は? 夫婦外出は? 社会保障弱い、単一人種で気味悪い、電車の席で眠る、贈り物高すぎる、パチンコ・ゴルフなど狂人、(-評価多い代表例)

(Table 1) 異文化接触当初の日本(人) 評価と三年以上居住後の評価

分野	在日外国人		在外日本人	
	当初	>3年	当初	>3年
自然環境	+1.5	+3.7	+2.8	+4.8
人間性	+3.6	+4.7	+4.8	-2.4
マナー	-1.6	-4.1	-2.7	-4.2
交際人間関係	-1.5	-5.1	-2.4	-4.3
社会生活	+3.5	-3.3	+2.6	+3.8
伝統文化ほか	+0.9	+2.2	+0.7	+2.9
TOTAL	+1.1	-0.3	+1.0	+0.1

2. 自然環境への信頼

日本人の〈マナー〉〈人間関係〉の不味さは今に始まったことでないが、〈人間性〉をも含めて、異文化の中で味わう日本人の自己不信の大きさはどうしたものか。だが、その中でますます優越感を深めるのが日本の〈自然環境〉であるようだ。

日本に来た外国人は、都会の騒音や花と緑のないコンクリート・ジャングルにまず驚く。だが年とともに、郊外や山水の風景、どこにも海のある美しさになじんでくる。それでも多くの国の出身者に容易に受け入れられないのが、四季の変化の厳しさである。南米や東南アジアの出身者は「日本では服装が三種類必要だ」とぼやくのだが、自然への非難なのか経済問題なのかはわからない。

一方、海外に住んだ日本人は、かなり高い適応性を示し(次節)ながらも、年とともに、四季の変化の美しさ、自然水への安心を日本への郷愁として強く抱き続ける。

異文化適応の状況

1. 生活の満足感

現在の日本(海外)生活適応の状況を、主調査追跡の形で回答を求めた。外国人、日本人それぞれ 361; 156 人が対象。主調査との関連を得られなかったが、日本人の適応は意外に高かった。選択肢を、統合、同化、拒否(*6)、孤立としたが、居住の目的と質問の仕方によって回答が動きうる不安を残した(Table 2, 3)。

〔質問〕現在の日本(海外)の生活について

〈帰国者の場合その前の状況で〉	(Table 2) 適応の関係図
1. 楽しく生活している	自国評価
2. このままもっと住みたい	+ -
3. 早く自分の国に帰りたい	相手国 + 1 統合 2 同化
4. どこにも良い所なんてない	評価 - 3 拒否 4 孤立

(Table 3) 異文化適応の状況 [回答 %]

関係	在外日本人	在日欧米人	その他在日外国人	
1	51.2	48.0	39.2	
2	20.5	14.1	20.3	
3	21.9	19.6	14.6	
4	4.0	6.5	13.1	各合計 100. %

なお、〈楽しく、いつまでも住みたい〉にしたところで、帰化、あるいは国籍変更への意思については、欧米人の10%、その他の30%以上が「可能性はある」と答えているのに、日本人には特別な事情のほか存在しない。〈ものわकारの良さ〉と同居する集団帰属意識の強さは後の問題としたい。

2. 外国人の問題提起から〈生活の矛盾〉

「困った」「驚いた」「意外だ」「不思議だ」ほか、体験したカルチャー・ショックの種々相(*7)とは別に、提言として「日本人の生活にみる矛盾」を収集した。とくに順位はないが、回答した在日外国人189人の中から、類似の内容が5件以上認められたものを整理する。一部質問では「コントラストの不思議」となっていた。

1) 日本は最高に言論が自由の国? それとも最高に不自由の国、どちら?

——わがもの顔に公道や駅前を占拠する極左極右のマイク、やくざの示威。他方では先輩上司まわりの関係者など、がんじがらめの干渉や圧力で、何一つ自由な意見発表もできない人間関係の仕組み(*8)——

- 2) 難しい入試と学業の厳しさ。だのに学生はなぜ酒、マージャン、遊びに熱心?
- 3) 着物の美しさ。だのにネクタイの色など何故センスに欠ける?
- 4) 列車の速さと走行ダイヤの驚くべき正確さ。他方でマナー最低の乗客たち!
- 5) 美しい近代的ビルの壮観。だのにウサギ小屋とかマッチ箱とかいわれる住居群!
- 6) 技術の高度さと先進性。それとは逆に役所や官庁の古い仕組みと非能率!

- 7) 人々はとても親切。そのくせ困っている人を見ても誰もが見て見ぬ振り。なぜ？
- 8) 家庭の電化は世界の最高水準。だのに何故くみ取りトイレなんてあるの？
- 9) 深刻な不景気といわれる。だのに花火大会は一夜で何十億円をパッと使う。
- 10) 華やかな博覧会。でも観客には配慮がなく、陳列の都合で歩き回らせられる。
- 11) 夫婦のデートが見つからぬ不思議。だのに親と子の睦まじい姿や一家揃っての外出姿ならいくらでも見える。

このような一連の対比矛盾は日本文化の二面性を示している。美しい、高度なものは、それ自体が求められた価値であって、他面の日常生活から要請されたり、帰結したりするものでは決していない。日常生活の意識は依然として、集団帰属であり自然環境への甘えなのである。

日本人の集団帰属性の強さ

先に日本人の国籍への執着傾向について述べているが、いわゆる島国思考(*9)と納得できる以上に深く生活の意識として定着し、時として「いじめ」の底流となりうる(*10, 11)ものであるだけに、現代の教養の中での繰り返しての改善を求めたい点ではある。ここでは1978から1996までにわたる、時間を越えた「宇宙人イメージ」アンケートの集計結果を報告する。

この間、かなり無秩序に、しかし全く先入観を与えない注意をもって、各地でアンケートを集めたのは次の4種の質問(から1, 2または3問)であった。

- A. あなたは宇宙からやって来たUFOの存在を信じていますか？
 UFOは無関係だが宇宙人はどこかにいると信じていますか？
 生命は(また高等生命は)地球だけにしかないと考えますか？
- B. 宇宙人がいるとすると、次の中でどんな姿だと思いますか？
 1. ほぼ私たちに似ている 2. 怪獣か奇異な姿 3. 地球人よりも美しい
- C. 宇宙人がいたらどんな姿でしょうか？ あなたの想像する宇宙人のイメージを画に描いてください。
- D. 最近読んだ小説、まんが、また最近見た映画、ドラマ、テレビ作品などで宇宙人を扱ったものがあれば紹介ください。作者、作品、宇宙人の姿もどうぞ。

以上の中、A. については1987以来毎年を受講学生(100人内外)を、該当講義前に調査するのだが、UFO実在派は $33 \pm 5\%$ 、宇宙人派 $49 \pm 5\%$ で10年間変動はない。他に地球独善派は数%どまりで、むしろ「見たもののみ信じる」が残余を占めていた。次に、B. C(描けないならBも可)については(Table 4)にまとめる。

(Table 4) 宇宙人のイメージに関する国際地域アンケート調査(%)

地域	対象	a. 似る	b. 怪獣	c. 美	他	備考
日本	中高大・549	112 (20.4)	290 (52.8)	68 (12.4)	79	1985-90
	小PTA・360	74 (20.6)	211 (58.6)	25 (6.9)	50	1980-85
中北欧	中高大・222	101 (45.5)	31 (14.0)	80 (36.0)	10	1990, 92C
南米	中高大・307	105 (34.2)	51 (16.6)	92 (30.1)	59	1978B

(他: 無答、不明のほか、機械のよう、図形状、無形、精神のみ、変形可能など)

(Table 4) では国別の対象数が少なく、有意な比較ができたのは怪獣で対極的な日本と二地域のみである。この傾向はやはり問. Dによって明白となる。つまり、世界で収集された作品1485編の内訳は、回答項目比 $a : b : c = 399 : 764 : 287^*$ となるものの世界の地域や国による格差は非常に大きい。あえて宇宙人のイメージに怪獣比といったものを導入すると、作品制作国の市民生活の意識がよくわかる。(*分類不能あり合計合わない)

$$R = b / a + 2c$$

ここでは、宇宙人小説の古典とされるMalley Lainsterの「The First Contact」はa. 名作のIvan Efremov「フッ素人」はc. に入る(*12)。だが難しい場合もある。容貌はわるいが人の好い「ET」はやはりa., といって邪悪でも超美人星の映画「バーバレラ」はc. になった。総計1485編では統計に耐えないが、それでも“R”の値は予想どおりであった。R最小は北欧で“0.11”、南米“0.25”。しかし北米では増加して“0.66”、世界平均は“0.89”。それには日本の寄与が大きく、残念ながらR=1.60 世界最高になる。南米、北欧といえど今日の世界では、異民族・異文化に対しても最もオープンな社会。だからといって日本人が排他的というのは当たるまいが、未知に対する警戒、臆病、それゆえの帰属意識の激しさとはいえるだろう。

明治維新当時、外国人は「毛唐」「異人」であった感覚が、地球市民の時代にもまだ消えずに、宇宙人を「怪獣」として蘇生しているというべきなのか。

自然環境への帰属と甘えの問題

一日の風向も天候も地域ごとにめまぐるしく変わり、風と雨が環境をある程度は浄化してくれ、また高い湿度が腐敗処理も促進してくれるという、大陸に比べて全く便利にできているわれわれの国土では、自然環境への安心と甘えが強くなるのも当然だろう。時々の関連アンケートの整理から、われわれの生活の意識を探り出す(三次調査)。

A. [奈良若草山稜線の草原で遠足の学童たちが弁当を開いて、立ち去ったあとにかなり新聞

紙や食べかすが散乱している写真を示して) このまま放置して、自然に浄化されて目立たなくなるまで何日くらいかかるか? ——南米1978、日本1979、ドイツ(ケルン)1984。

いずれも関係大学の学生に訊ねたもの——

回答結果 日本 22.6日 (90名); ドイツ 33.0日 (41名)
南米 25.4日*(35名)

* 分散値(Variance) \approx 2000? <数ヵ月、数年の答あり、拡散の記憶あり>
なお、回答の数字は Sample Median (標本中央値) である。

B. 自然環境の異常における安心度について: ——1984, ドイツ・ケルンにおいて、社会教育研究講座(70-80人)の協力をえて、帰国後日本の同種会合(延べ200人)と比べたもの。

3文あり、賛成の答は左が日本人、右がドイツ(主に)人の場合である(%)。

1) 今年の水不足が深刻でした。もう今から「来年こそ大変」と心配する人がいます。でも別の人々は「今年は日照りだったから来年は水は大丈夫のまわりだ」といいます。どちらも証拠はありませんが、私は来年は大丈夫とおもいます。

回答 75 (%) : 48 (%)

2) 今年は凶作でした。海外から多くの食料を輸入しました。まあ悪い年が続くこともないから気にしません。来年は少しはよくなるでしょう。

回答 69 (%) : 42 (%)

3) 荒れ地であっても、種を蒔けば芽もでるし、耕せば畑になるよ。要は努力だね。

回答 87 (%) : 49 (%)

なお、この項は同年スペインでPTAの協力を得たが20(%) (40人中8人の賛意)に過ぎなかった。

以上、自然の善意への帰依、努力への信仰は、「原因のある結果は取り除くまでである」とするドイツ人たちに比べて、日本人は「甘い」「お人好し」などの言葉に尽きるが、神戸の大震災や北海道のトンネル事故を体験した1996年の日本人には、幾分の変容があるのか否か知らない。やはり幸せな国土ではある。

C. 環境破壊また汚染についての関心順位

1990、92両年、現地の社会教育の会合に協力を求めて、ドイツ(96人)、スペイン(85人)、ほか(イタリー、ポルトガルなど21)の青年層から「現在の各種の環境破壊、汚染、公害などの中で最も関心を持つもの一つ」の提示を求め、のちに日本の学生319名との対比を求めた。順位は次の通りであった。

* ヨーロッパの場合 (202名)

1) ごみ処理と排水	22名
2) 水質汚染	19名
3) 大気汚染	15名
3) 温暖化対応	15名
5) 森林破壊	11名
6) オゾン層フロン	8名
6) 核と放射能	8名
8) 食品・薬品公害	7名

* 日本の場合 (319名)

1) 核と放射能	62名
2) 食品・薬品公害	29名
3) 海洋汚染	26名
4) 教育(いじめなど)	25名
5) 資源問題(石油など)	21名
6) 水質汚染	18名
7) 大気汚染	14名
8) ごみ処理と排水	11名

〈 以下省略 〉

両者順位をみれば、ロシアからの核物質たれ流し、学校のいじめ(自然とはいえないが記述多い)など調査当時の世相がよくわかる。だが、残念だが比較すると、温暖化、森林破壊、オゾン層など、かなり新しい知識が一般化している彼らと、事件ニュースに振り回される(良くも悪くも)われわれの違い〈新聞報道の姿勢か?〉。そしてまた、ごみ処理と排水、水質汚染、フロン対策など、身の行動力や積極性が問われる部面での彼らとわれわれの順位の差は歴然というほかない。

環境破壊・汚染・公害など責任に対する意識

自然環境に対する甘え、また上にみる行動力や解決姿勢の消極性などから、背景となるわれわれの自然認識や責任意識に問題を感じて設定したのが次の調査である。ここでは、できるだけ象徴的な質問内容で日本人とヨーロッパ人、とくに積極と消極また主張と謙遜で、われわれと対極的に捉えられるドイツ人との対比を試みたかったのである。

質問に答える選択肢は「その他」を加えて“12”あり、回答者は正答を“3つ”まで選択できるようにした。

〔質問〕現在の社会には、さまざまな形で自然環境の破壊や汚染、公害といったもの発生して困っています。努力してもなかなか防げない根本的な原因は何でしょうか? 以下の答から三つまでを選んでください。

- 1) ごみのポイ捨てなど、市民ひとりずつの“だらしなさ”の集積である。
- 2) 企業が儲けようとばかりする結果である。
- 3) そもそもわれわれの国土が狭いことに根本的な原因がある。
- 4) 国の計画ミスや規制、監督、処罰の甘さなど、政府行政の失敗が大きい。
- 5) 何たって科学(者)や技術(者)の怠慢や遅れのせい。

- 6) 昔に比べると、何ととっても市民の体力が落ちているから。
- 7) マスコミのせいだ。
* 日本では騒ぎ過ぎの意味だが、ドイツでは取り上げないせいだった。
- 8) 要するに市民の抵抗運動が弱かったから。
- 9) 文明が高い国の必然であり仕方がない。少しはかっこもいいだろう。
- 10) 行政機関などの「見て見ぬふり」に責任がある。
- 11) その他の意見もどうぞ []

上の回答を日本（学生およびPTA別）、ドイツ、スペインの国別に集計したものが、(Table 5)である。協力者は日本（学生119；PTA160）279名、ドイツ120名、スペイン112名であったが、各自が三つを選択したため回答の合計はほぼ三倍になっている。なお調査時はドイツ1984、スペイン1988、日本は1985、86だった。

(Table 5) 自然環境の破壊、汚染、公害などに対する根本的原因は？

原因	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	計
国名												
ドイツ	12	98	38	53	10	4	11	40	2	63	21	352
スペイン	40	41	20	44	76	6	8	31	14	31	18	329
日本PTA	92	21	67	36	93	13	31	22	89	12	1	477
日本学生	80	25	48	40	61	6	14	26	16	31	5	352
外国人%	7.6	20.4	8.5	14.2	12.6	1.5	2.8	10.4	2.3	13.8	5.7	100
日本人%	20.8	5.6	13.9	9.2	18.6	2.3	5.5	5.8	12.7	5.2	0.4	100
検定	**	**			**		*		**	**	*	

(**は1%で有意、*は同じく5%で有意である。)

この調査は、まだ自然環境の破壊、汚染、公害が現在ほど多岐にならない、いわば地域紛争期のものであるが、われわれの問題と責任の所在のあいまいさは独特である。まだまだ「公害」時代初期の道徳教育的解決^(*)の影響も残っているのだろうか。日本人とドイツ人の回答それぞれ上位4つを、たまたま比較するのはショックでさえある。ドイツ人は「企業の利潤本位」、「政府の計画ミス」、「行政の怠慢」を追求するとともに、自分たちの「市民運動の弱さ」を反省している。スペイン人も大差ないことから見ても、ほぼヨーロッパ的発想かも知れない。われわれの場合、「国が狭いから仕方がない」、「文明が高い反面だ」、「科学技術の遅れ」と、責任を自然に押しつけて逃げてしまい、反省は「一人ひとりのだらしなさ」という効果のないモラルに閉じ込めてしまう。「マスコミのせい」が全く逆の意味に解されたことも大きい皮肉であっ

た。「その他」ではドイツの場合、環境犯罪の告発や制裁の措置、市民監視機関への援助などの意見が多く、日本ではやはり、情報公開や広報活動など行政への注文、モラルへの自己反省であった。

考察と今後の問題

以上の調査には、さらにデータの不備を補う関連分析や、場所と対象を集約した今日的アンケートが必要になるが、面接やケース追跡の資料も加えてほぼ次のように考察をしている。

- * 異文化接触での日本人へのショック、また日本人としてのショックは、いずれも「マナーやエチケット」また「交際と人間関係」に絡む、私たちのコンプレックスに関わってる。奇妙なことは「日本人の人間性(性格、人間味)」「伝統的文化や習慣」について、外からの敬意にかかわらず、日本人自身が否定的ショックを多く持っている事実である。日本人の「統合性・物分かりのよさ」も、突きつめると、こんな面でのやせがまんを感じる。「楽しい・帰国したくない・帰化したい」の連関は、地域によってかなり高いが日本人には殆どない。学習努力の「楽しさ」なのである。
- * そのことは集団的帰属感の異常な強さからもわかる(*14)。異人、毛唐といった排他的伝統は今日では消えて「物珍しさ」にさえなっているが、これも帰属範囲を広げた学習の成果。意識下を探ると「宇宙人イメージ」のような現実がまだまだ残っているのだろう。「日本人は世界一に性悪説に立っている」(*15, 16)との調査があるが、自分は苦勞して今日をえたのであれば、帰属の外部が善でないのは矛盾すること決してない。
- * 多くのコンプレックスを超えて、強固な帰属意識を作っているものは、「社会とくらし」「自然環境」での自信である。前者には「争いなく」「みんな一緒」で「安全性」と「秩序」があり、「何でも品物がある」安心の優越感がある。後者には、何といても「土には確実に緑が育ち」「どこにも水があって飲める」し、「四季の変化は絶妙」で「気象には任せおける輪廻」があり、「自然の浄化作用には不安がない」という絶対安心の信仰があった。
- * しかし、この信仰には人間による破壊や汚染をも許される「甘え」があった。不安や恐怖もないが責任の意識も育たなかった。せいぜい感謝したり自然へのモラルを呼びかけるだけで、事故に対しての方策が遅れた。
- * ここで責任を問われると、解決に代わるものとして「神話」が創案される。汚染や公害には、原因論でなくて、責任論でもなくて、「日本は国土が狭いから」「日本は文明国だから」・・・といった不可抗力論である。「ごみは誰でも捨てることがある」なんて〈納得〉が罷り通ったこともある。その実、広い国や発展途上国すら取っている方策を怠けてしまう

ことが多かった。「神話」が解決してくれたのだ。

- *たとえば、「国土が狭い」という〈納得〉は別の国土条件に立てば論理は成立しない。工場地域での排水や大気汚染の問題が騒がしかったころ、当時西ドイツの研究者から質問を受けて困ったことが忘れられない。「日本のような恵まれた条件の国に何故環境汚染の問題があるのか？」とのことであった。「狭い」とは説明できなかった。「万一、失敗しても自然の救済もあるんじゃないか。川はすべて大洋に注ぐ。風は強くいつも方向を変えて吹き、周りはすべて大洋だ」と。確かに彼らの立地は厳しい。狭い点でもさほど変わらない上、空も土も隣国に接して汚染の監視下にある。川の流れは全て隣国に入り、たとえばベネルックス諸国の一万種を超える項目の水質検査を受けている。全ての破壊、汚染、公害は、即座に浄化、修復、根絶の自己責任と向かいあっているのだ。
- *今回のデータを分析してのわれわれ日本人への教育的課題は、何としても甘い自然信頼からの脱皮と「神話」を打破できる日常生活の科学性、自然の変容を責任者としてみることのできる自立性と行動性を身につけること、つまるところ未来を生きる地球市民になれることだろう。三年間の変容、また少ないながらプラス方向へのショックを収集しながら、さほど困難なことではないと感じている。
- *この報告では、ページが少ない上、あまりにも資料の広がり（時間的にも、内容や方法的にも）が大きくて検証に困難があった。また、あと一段の調査が欠ける恨みを残したし、選択が性急で直接必要のないデータまでは検討ができなかった。機会をえてさらに細かい追求をしたいと願っている。
- *「自然環境との関わりが即自己責任として同義語」である、環境にみるヨーロッパ的自立感覚は、現在の教育的意味からは羨ましいのであるが、かといってわれわれが異端なのではない。自然征服の中国式唯物論ではないが、ロシア流の無知を含めた放任垂れ流しではない。もちろん Ayuton Clenac (アマゾン・ヒバロ族の哲人) の「人と自然との一体化、同一化」でもない。自立的でも社会的でもないかわり、日本人の甘えは情緒的・信仰的で、解決はモラル的 (Table 5・1)) だ。アイヌ人の伝習では「山の木は誰が伐採してもよいが、あとに二本の苗を植える」という。「一本は弁償のため、他は山の神への感謝 (保険? 利殖?) のため」とか。同様の話は全国に多い。美しい共生の一つ。ただ自然科学や技術の急速な発達に追従できぬ自然観、環境観の遅れがある。「滅多にはないこと」と手を抜く非科学的甘えが、エイズをも広げた。

こうした自然環境への甘えの種々層の中で、今の日本人大衆の生活意識を動的に把握して、教育的ガイダンスのあり方を探りたいのが、この報告を一応締めくくるに当たっての今後の課題であろうか。

終わりに

この報告は1978年、故直塚玲子・広瀬智生・N. 梅木各氏と四人が大阪府文化振興室より研究調査の委嘱を受けた際、報告者が担当したテーマから拡大発展したものである。問題が問題と呼んで、本報告冒頭の通り多くの協力者をえて長期の研究になったが、スタート当初の上記三氏の啓発と援助には今更ながら懐かしく、有り難く感謝している。

また、次回以降の報告分も含めて、大阪府を中心に近畿地方の多数の小中高校やPTAの方々、報告者の受講生、さらに海外の学生生徒、社会教育等参加者には調査に面倒な協力を頂いた。多大の援助を賜った調査委託の先生方とともに心からの謝意を申し上げたい。

なお私事になるが報告者の半生は宇宙科学を専攻し、海外生活の中で、後に教育の比較調査へと大きく転進した。したがって大きい疑問と問題意識を見出しつつも、急がぬ当報告の内容は長く個人的興味のままだにデータを蓄積していた。公表にあたり、無秩序に時間的経過が長く、検証の正確さに不足する点の言い訳としたい。

REFERENCES

- 1) 国場益生：1995 比較概念の展開；山口他編「比較文化論」世界思想社，PP 29-44
- 2) 高橋 敷：1981 自立にみる東洋型と西洋型；児童心理、金子書房、Vol. 32-4, pp 87-91
同 ；1985 日本人にみる粘りとあきらめの論理；同上 Vol. 34-8, PP 101-106
- 3) 直塚、広瀬他：1980 異文化間の国際理解に関する調査報告；大阪府科学教育センター
- 4) 共同研究：1984-87 (年次調査報告) 家庭機能の変容と課題；大阪府教育研究所連盟
- 5) 高橋ほか：1983, 4 (家庭教育・統計討議資料) 80年代の家庭；大阪府家庭教育総合セミナー
- 6) Ruben D. : 1989 The study of cross-cultural traditions; J.In.R, Vol: 13-3, PP 229-31
- 7) Naotsuka R. : 1982 "Mutual Understanding of Different Culturs" Daisyukan
- 8) 高橋 敷：1995 "自立" 比較文化論的アプローチ；京都市大学講座テキスト10-17、SKY
- 9) 高橋 敷：1992 国際理解と愛国心；「学校道徳教育研究資料」日本文協、PP 12-14
- 10) 直塚玲子：1981 「欧米人が沈黙するとき」(意識を超えて)；大修館、PP とくに242-8
- 11) 高橋 敷：1986 校内暴力の変容と内向化；補導研究、少年補導協会、Vol. 35-5, PP 13-21
- 12) Efremoff I. : 1955 Flying in the Universe (原題) 「フッソ人」はハヤカワ訳
- 13) 高橋 敷：1978 子どもの自然環境を点検する；補導研究、少年補導協 Vol. 18-4, P13-28
- 14) Freund F. : 1983 Ein personlicher Brief aus Univ. Köln, zu Takahashi
- 15) 千石保ほか：1973 他者不信の文化；「比較日本人論」(調査資料)、小学館、PP 200-217
- 16) 剣持武彦：1992 民族性をたずねて〈性善性〉；「比較日本学のすすめ」朝文社